佛教文化学会紀要
平成二十八年十一月一日　第二十五号　抜刷

第二次世界大戦下の南方仏陀祭と政治宣伝

文化庁文化部宗務課専門職　大澤広嗣

第二次世界大戦下の南方仏陀祭と政治宣伝

大澤広嗣

はじめに

第二次世界大戦下の日本で、仏教界と政府が一体となったウェーサク祭（Vesak）が計五回にわたり開催された。その祭事は、宗教儀礼とはいえ、日本による東南アジア進攻を背景に実施されたものである。本論では、戦時下の日本で行われたウェーサク祭について、各回における式次第の内容と後援団体や関係者を整理して、その意味を検討したい。

そもそも、ウェーサク祭とは、東南アジアの上座仏教徒が、ウェーサーカ月（四～五月）の満月の日を中心に行う重要な仏教行事であり、タイ（旧、シャム）、ミャンマー（旧、ビルマ）、スリランカ（旧、セイロン）などで見られる。この日に、民衆は寺院に参拝をして、行列や歌舞、大提灯が展開するという。南方の伝承によれば、仏教の教主である釈尊は、満月の日に生まれ（誕生）、悟って仏となり（成道）、亡くなった（涅槃）とされる。さらにミャンマーでは、この日が初めての説法（初転法輪）を行った日でもあるという。近代以降には、セイロンのダルマパーラ（Anagārika Dharmapāla, 1864-1933）が設立した大菩提会（The Mahābodhi Society）による仏教復興運動と共に、ウェーサク祭が盛大に開かれるようになっていった。

そして、第二次世界大戦において、日本は東南アジア各地を占領した。現地の上座仏教と日本の大乗仏教が、同じ仏教であると、政治宣伝を目的に行われたのが、本論で述べる国際仏教協会の主催による「南方仏陀祭」である。

この協会は、一九三三（昭和八）年に仏教学者が組織した学術団体である。しかし発足当初は、西欧の仏教学者や東洋学者との学術交流を行っていたが、日本の東南アジア進出に従って、南方仏教に関する調査研究と現地との連携を強めたのである。[1] その一環として、一九四一（昭和一六）年から、ウェーサク祭を「南方仏陀祭」と称して、政府の各省庁の後援により開催したのであった。[2]

第一回南方仏陀祭（一九四一年）

1　式典の概要

第一回南方仏陀祭は、一九四一（昭和一六）年七月五日の午後一時より、東京の日比谷公会堂にて行われた。主催団体である国際仏教協会は、「昭和十六年わが国最初のこの祭典」[3] と位置付けていた。

後援団体に、情報局、外務省、文部省（現、文部科学省）、東京市（現、東京都）、財団法人国際文化振興会（現、独立行政法人国際交流基金）、財団法人国際学友会（現、独立行政法人日本学生支援機構）、財団法人日印協会（現、公益財団法人）、日本ビルマ協会、財団法人日本タイ協会（現、公益財団法人）、日本印度支那協会、財団法人日仏協会（現、公益財団法人）、財団法人南洋協会、[4] 東亜文化協会、青年教養連盟、財団法人大日本仏教会、大日本仏教青年会連盟、東京仏教団（現、東京都仏教連合会）、朝日新聞社東京本社などの計一八団体が名前を連ねた。特筆すべき事項として、日本ビルマ協会は、ビルマに関わった臨済宗妙心寺派僧侶である後藤亮一（一八八八～一九四九）が代表者を務めた。[5]

当日は、情報局第三課長、参謀本部陸軍少将浅野某、文部省宗教局長の阿原謙蔵、タイ武官のルアンソムプラナ大佐、駐日トルコ大使夫妻ら、法華宗管長岡本日盛ほか、[6]「ソ連、フインランド、ギリシア、オランダ、イラン、エヂプト、泰国ら十一ケ国使臣も列席」[7] したという。

南方仏陀祭は、三部構成に分かれ、国際仏教協会の代表常任理事で、立正大学教授の木村日紀（一八八二～一九六五）が司会を務めた。

第一部は、駒沢高等女学校による讃仏歌（花祭の歌）の合唱、浄土宗増上寺の楽衆による雅楽の奏上があった。パーリ語による仏教経典の読誦を経て、讃仏歌（成道の歌）の合唱が行われた。

第二部は挨拶で、国際仏教協会会長の井上哲次郎（一八五五～一九四四）、情報局総裁の伊藤述史（のぶふみ）（一八八五～一九六〇）の二人からの祝辞があった。

第三部は、音楽舞踊として、日本舞踊家の花柳徳兵衛（一九〇八～一九六八）が率いる花柳徳兵衛社中が、二作品を上演した。

演目「タイ国舞踊――祈りとラーマーヤナ」は、作曲は古関裕而（一九〇九～一九八九）、装置は佐原包吉、照明は松崎国雄である。配役がハヌマン（白猿）は花柳新兵衛、竜女は秋山恵子、夜叉は花柳徳兵衛であった。演目「仏陀と孫悟空」は、作曲・装置・照明が前掲と同じで、配役が仏陀は鈴木清隆、孫悟空は花柳徳兵衛であった。作品には、踊り子や侍女が多数出ている。『中外日報』は、次のように報じている。

> ブツダガヤを想はせる装置、四段に仕組まれた祭壇の上には大きな円光の中に静かに坐すビルマ釈迦像を祭り、駒沢高女の諸仏歌合唱と雅楽が奏せられる頃三名の黄衣を纏つた印度僧が右肩偏祖の南国姿で登場、パリー〔パーリ〕訳転法輪経を読誦すれば留学仏徒によつて香り高き南方の盛り花が献供される、印度僧の読経が終り代つて両側に趺坐した十二名の日本僧により般若心経が誦せられ会衆一同合掌してこれに和すれば静かな南国の樹陰が彷彿する。[8]

その後、映画「南進二千哩」が上映された。この式典は、社団法人日本放送協会（現、放送法第一六条に基づく

特殊法人）によるラジオで、全国と海外に向けて放送された。さらに、社団法人日本映画社の制作による「日本ニュース」の番組として、南方各地にて上映された。

南方仏陀祭の開催に際して、海外からの祝電も送られた。インド大菩提会会長のムカルジー博士、ビルマ上院議員でビルマ大菩提会会長ウ・ツウイン、タイのスダスナディバワーラム寺法主のソオムデエチ・プラ大長老、国際仏教協会華南支部長の鉄禅大師と副支部長の謝為何、バンコクの泰印文化研究所のサチャナンダ長老、ベトナムのハノイの北圻仏教総会、ユエ（フエ）の安南仏学会会長からであった。

2　政治的背景

この祭典にある政治的背景を見てみよう。『中外日報』によれば、「南方仏教国に対する認識を深めその諸国民の親善を増進するため」[9]で、『読売新聞』では「わが国でも四月八日の花祭、成道会、涅槃会と別々に行はれてきたこのお祭を〝信仰一筋〟に南と北とを結んで初の〝民族仏教祭典〟として一つに取り纏め採り上げたものである」[10]と報じているように、大乗仏教と上座仏教を一堂に会そうとしたのである。

第一部でのパーリ語経典の読誦は、釈興然の弟子ではなく、ベンガル人のラーストラパーラ・サンディリヤーヤナが導師を勤めた。協会職員であった東元多郎（一九一二～一九九三、後に東元慶喜）は、彼が外国人だから導師を勤めたと証言している[11]。また、国際仏教協会の雑誌『海外仏教事情』には、この読誦はラーストラパーラのみ記載されているが、『読売新聞』によれば、高野山大学教授であった吉岡智教の名前もあるので、吉岡も脇導師として読誦を行ったのであろう[12]。前述のとおり、「三名の黄衣を纏った印度僧が右肩偏祖の南国姿で登場」[13]した。

第二部の挨拶で、国際仏教協会会長の井上哲次郎は、祝辞の中で次のことを述べている。

国際仏教協会は創立以来南方仏教諸国との連携に幾多の事業をなして来ましたが、日本でもこの南方諸国の

一大行事たるウエーサーカー祭を行ひたいとかねゞ〳〵思つて居りました。この頃南方仏教諸国との関係が深まりつゝある際、皆様にこの行事を認識して頂き、且つは南方仏教徒の日本に対する関心を高めんと欲するのであります。……南方仏教に因む行事が日本で初めて挙行されるのは誠に有意義と存する次第であります。[14]

発言の中で井上は、「創立以来南方仏教諸国との連携」と述べたが、当初の協会は西欧諸国との学術交流が中心であった。つまり、東南アジアを重点化したことが窺える。

同じく第二部の挨拶で、情報局総裁の伊藤述史は、「文化外交の必要をとき仏教本来の意義と世界史の転換する現代との交渉に深く意をとどめよと激励した[15]」後に、次のように述べている。

大東亜共栄圏内の諸民族は其数に大小の差はありますが、大体に於て仏教を信奉する民族であると云ふ事が出来るのであります。今や日本は東洋の盟主として東亜に新しい秩序を建設するのであります……。これから毎年「ヴェーサーカ」祭をおやりになるのは、誠に結構でありますが、蓋しそれは同一宗教徒が一堂に会して、同じ宗教儀礼を営む事に依つて御互に理解し合ひ、御互の認識を高めて行く事は勿論、更に仏教本来の教義を悟られて進むべき途を勇敢に進むと云ふことになりたいと思ふのであります。[16]

第二部の挨拶で、主催者側として井上哲次郎が登壇したが、続いて情報局総裁の伊藤が祝辞を述べたことは、後援する政府各省を代表するものである。それは、情報局が、情報収集や宣伝を担い言論と思想の統制を行った、内閣直属の機関だからである。[17]

情報局は、南方地域に対し、南方仏陀祭を利用して、「大東亜共栄圏」の建設という日本側の理念を現地の仏教徒に伝えようとしたのである。

第二回南方仏陀祭（一九四二年）

1　式典の概要

第二回南方仏陀祭は、一九四二（昭和一七）年七月二四日、午後六時より日比谷公会堂で開催され、三千人の観衆が集まった。昨年に続いて、「大東亜共栄圏確立に協力するこれら諸国の仏教について認識を深め且つ提携親善を期するため」[18]に行われたのである。

第一部は、司会が国際仏教協会の常任理事で、真宗高田派学僧の長井真琴（一八八一～一九七〇）であった。国民儀礼に続いて、長井による開会の辞、讃仏歌、演奏「世界の黎明」[19]、雅楽の後、セイロンで受戒した釈仁度（鳥家仁度）を導師とするパーリ語経典の読誦があり、讃仏歌「成道の歌」が合唱された。「国民儀礼」とは、宮城（現在の皇居）遥拝や国歌斉唱を行ったものである。

第二部は、会長の井上哲次郎と駐日タイ王国大使のディレーク・チャイヤナームの挨拶の後、木村日紀による講演「将来を語るインドの過去」があった。

第三部は、童謡「八の日東亜の花まつり」、「お馬よありがたう」が披露され、東元多郎原作、花柳徳兵衛振付の舞踏劇「シビジャータカ」、ドイツのエメルカ社製作の仏伝映画「アジアの光」が上映された。

祭典の模様は、午後六時三〇分から五〇分まで全国に向けてラジオ中継がされ、さらにインド、セイロン、ビルマ、タイ、フランス領インドシナに向けては、録音による海外放送が実施された。この放送を聞いた「泰国のワラワン殿下より感謝の書翰がよせられた」[20]という。

これまで取り上げた第一、二回南方仏陀祭の開催は、準備不足のため、開催が遅れていた。『海外仏教事情』に掲載された第三回仏陀祭の記事によれば、「会場の都合上一昨年〔一九四一年〕昨年〔一九四二年〕も天文学的には二ケ月程おくれて七月にいとなまれた」[21]とある。五月の満月の日付近に行うべきところ、第一、二回は七月に開

催されたのである。続く第三回南方仏陀祭では、ようやく五月に開催することができたのである。

2　童謡「八の日東亜の花まつり」をめぐって

第二回南方仏陀祭にて、童謡「八の日東亜の花まつり」が披露された。戦時下の仏教界にとって、「八日」に特別な意味が付与された。四月八日は、周知のとおり、釈尊降誕会として花祭りが行われてきた日である。一九四一（昭和一六）年一二月八日に、日本は対英米に宣戦布告を行い、一九四二年一月二日の閣議決定で、毎月八日は「大詔奉戴日」となったからである。

その頃にできたのが、「八の日東亜の花まつり」である。国際仏教協会が関与した楽曲ではないが、戦時下の仏教界に関わる事象であるため、ここで取り上げておきたい。

童謡「八の日東亜の花まつり」は、一九四二年三月にコロムビアから発売された（レコード商品番号三三七五三）。詞は江崎小秋、作曲は佐々木すぐる、歌はコロムビア児童合唱団、計二分三〇秒の楽曲である。歌詞は、次のとおりである。

一、あの日、世界にそゞろいた／この日本の決意こそ／忘れてならぬ、勇気なす／八日の朝だ、八の日だ
二、世界平和を築かんと／教へを立てた、お釈迦さま／悟りの道を開いたも／八日の朝だ、八の日だ
三、桃や桜の花まつり／甘茶にむげてお釈迦さま／お生まれなつた今日もまた／八日の朝だ、八の日だ
四、今日だ、うれしひこの日こそ／小国民の私らも／東亜のために、立ち上がる／八日の朝だ、八の日だ[22]

作詞を担当した江崎小秋（一九〇二～一九四五）は、仏教童謡の普及に努めた人物である[23]。仏教を主題とした童謡を広めるべく、一九二四（大正一三）年に、童謡「花まつり」の誕生に関わった。この童謡は、江崎が、詩人の

野口雨情（一八八二～一九四五）に作詞を依頼して、それを携えて弘田竜太郎（一八九二～一九五二）に作曲を要望したものである。弘田によれば、その頃、「私が仏教音楽に新しい旗を立てようと野心を起して、実際運動を開始した時、……作曲を依頼しに小秋氏が私を訪れたのが、その知己となる始まりであった」[24]という。

江崎は、岐阜県本巣郡真桑村（現、本巣市）の農家の長男として生まれた。薬剤師を志すが、東京にいる叔母の勧めで勉学を目的に上京した。その頃、新義真言宗豊山派（現、真言宗豊山派）僧侶の伊豆宥法（雅号、孤村）から仏教を学んだ[25]。大原簿記学校、国民英学会を経て、一九二二（大正一一）年に日本大学法文学部美学科に入り、文学を勉強するが、関東大震災のため退学した。豊山派僧侶の小林正盛（一八七六～一九三七）が主宰した雑誌『飲光』（飲光社）の編集助手を務めた。また、詩人仲間である勝田香月（本名、穂策。後に東京市中野町会議員）、井上康文、宵島俊吉（本名、勝承夫。後に社団法人日本音楽著作権協会の初代会長）などと共に、雑誌『京傷』を刊行した。一九二四（大正一三）年より伊豆と共に、雑誌『仏教童話と童謡』（仏教芸術社）を刊行するが、一九二六年に廃刊となった。その後、日本仏教童謡協会を設立して活動した。江崎は、一九四五年の東京大空襲で没したという。

第三回南方仏陀祭（一九四三年）

1　式典の概要

第三回南方仏陀祭は、一九四三（昭和一八）年五月一八日から翌日の一九日まで実施された。第一、二回は、本来の五月から遅れて七月に実施したが、今回は、「タイ国その他南方仏教徒の一斉に仏徳をたたへるその日をえらび」[26]開催された。読売新聞に社告が掲載され、国際仏教協会の主催で、後援団体は外務省、文部省、大東亜省、情報局、大政翼賛会、東京市、読売新聞社である旨を知らせるものであった[27]。

初日の一八日には、第一次式典として、東京芝の浄土宗大本山増上寺の本堂にて、釈仁度を導師として、午後八時から翌午前二時まで、パーリ聖典の通夜読経が行われた。仁度がセイロンより携えた貝多羅葉のパリッタ（日用読誦の護呪経典）を用いた。吉岡智教、ラーストラパーラ、アベラツネ、ファンディーストらが参会した。

続いて、一九日の第二次式典は、日比谷公会堂に場所を移して午後一時に式典が開会された。司会者は木村日紀であった。

国民儀礼、開会の辞に続いて、東京仏教主義女学校連盟の当年当番校である淑徳高等女学校の生徒による合唱「讃仏」があった。増上寺楽衆による雅楽が奏上され、釈仁度、吉岡智教、大河内隆文が、南伝仏教の黄衣をまとって、中央の祭壇に安置されたタイ仏像の前に着座して、パーリ語の三帰依文を合誦した。アベラツネ、ラーマムールティ、サハイ夫人、サダニ、ラーストラパーラ、太田マチらが参列して、次に釈仁度より各々に五戒が授けられ、花束を手にして祭壇の周りを三度の右繞を行った。

「太田マチ」ことビルマ出身のドウ・チーは、日本放送協会によるビルマ向けの海外放送を担当した人物である。夫の太田与一郎もビルマ語放送の担当であった。[28] 中央の祭壇の仏像は、タイの仏像で、今回の第三回南方仏陀祭から安置された。釈興然が将来したものだが、この点は後述する。

第二部は、会長の井上哲次郎、大東亜大臣の青木一男、駐日タイ大使ディレーク・チャイヤナームの挨拶があった。読売新聞社の論説委員で社会学者の清水幾太郎（一九〇七～一九八八）の講演「南方より帰りて」が行われた。清水は、開戦初期に南方へ徴用され宣伝任務に携わった文化人の一人である。

第三部は、下八川圭祐、沢野八重子、梅田幸江らの独唱があり、文化映画「室生寺」（文部省制作）、文化映画「泰国の全貌」（企画鷺宮文彦、読売新聞社映画部制作、社団法人日本映画社提供）が上映された。最後に、「聖寿万歳」を三唱して、午後四時に閉会した。

同日の模様は、南方諸国に向けて、海外放送されたが、国内向けのラジオ放送はなかった模様である。「泰国ピ

ブン首相、ワンワイ殿下から同協会へ激励の祝辞が寄せられて[29]」いたという。

2　大東亜大臣青木一男の挨拶

第一回南方仏陀祭の挨拶は、情報局総裁であった。第二回は政府関係者の挨拶はなく、第三回は、大東亜大臣の青木一男（一八八九～一九八二）から挨拶がなされた。大東亜省が発足した一九四二年一一月には、既に第二回南方仏陀祭は終わっていたので、今回の第三回から関係省庁として名前を連ねたのである。青木は、挨拶のなかで、次のように触れている。

> 大東亜諸民族の共同意識……の源流を否少くともその最も重要なる源流の一つを私は大東亜諸民族の仏教信仰に求めたいのであります。／而してこの点に於て私が特に仏教信仰を重大視致しまする所以のものは啻に大東亜諸民族の大部分が現在又は過去に於て均しく仏教徒であり、若しくはあつたといふ点にのみあるのではなくして、個を殺して全を生かす慈悲、忍辱の無我の教へこそ大東亜戦争完遂、大東亜新秩序建設の最も有力なる武器であり、且つ推進力であると云ふ点になるのであります。[30]

大東亜大臣である青木は、アジアに広がる仏教が「大東亜諸民族の共同意識」であることを認識していたことが、窺い知ることができよう。

なお、青木は、長野県更級郡牧郷村（現、長野市）の生まれである。戦後の一九六七（昭和四二）四月に、財団法人善光寺日本忠霊殿造営奉賛会が、文部大臣より設立許可を受けた。当時、参議院議員であった青木が、会長に推薦され就任した[31]。英霊を奉祀する仏式霊廟の忠霊殿は、長野市の善光寺境内にて一九七〇年四月一八日に落慶式が行われた。

第四回南方仏陀祭（一九四四年）

1　式典の概要

第四回南方仏陀祭の第一次式典は、一九四四（昭和一九）年六月五日に、神奈川県横浜市港北区の真言宗三会寺（現、高野山真言宗に所属）の本堂にて午後一時から行われた。後援団体は、大東亜省、外務省、文部省、情報局、東京都である。

既に戦局は悪化しており、「決戦下に於ける催しなので、なるべく南方仏陀祭本来の趣旨のみを徹底させることにしてゐる」[32]という。パリッタの読誦があり、同寺の住職の釈仁度が導師を務めた。近隣から善男善女が参詣したが、寺院の周辺には農家が多く、供物の野菜は次の日の式典に供えられた。

第二次式典は翌日の六日の午後六時より、日比谷公会堂で開催された。この日は、「ウイサーカー星宿（てんびん座）と満月の会ふ六月六日の夕、南方の諸民族と時を同じくして挙行」[33]した。毎年、舞台装置家の橋本欣三の設計により祭壇が設営されていたが、物資と人手の不足のため、今回は設けられなかったが、宗教演劇の移動劇団「独立座」の助力を得て、祭壇を設置した。その祝祭も、戦時体制下のため、娯楽色を抑えたものであった。

第一部の開演後に、国民儀礼が行われ、タイやビルマの大使が参列して、木村日紀の開会の辞があった。東京仏教主義女学校連盟の当番校である牛込高等女学校（現、豊島岡女子学園中学校・高等学校）の生徒による讃仏歌「讃仏」が合唱された。法要に入ると、増上寺の楽衆による雅楽が奏上された。そこに、早稲田大学教授の武田豊四郎（一八八二～一九五七）が登場した。武田は、愛媛県周桑郡の出身で、「汎大乗主義」を唱えた仏教団体である「一如洞」を主宰した人物であった。武田は、「毎年四月八日の「花まつり」に於ける氏の印度装束は著名なもの」[34]として知られた。式典の模様は、東元多郎によって、『海外仏教事情』に紹介されている。儀礼の様子が活写されているので、長文になるが引用する。

折柄増上寺の勤修する雅楽のひびきにつれて、客席中央入口より一如洞阿闍梨武田豊四郎先生ならびに法妹多数、手に手に聖火を捧げてあらはれ、祭壇正面の階段より登場、梵語による欣求解脱讃・敬礼三宝・釈尊讃の読誦終つて、一同祭壇を右にめぐり定めの位置につく。

再び雅楽を奏するうちに上手よりセイロン持戒僧ソービタ長老釈仁度老師、黄衣をまとひ、アーナンダ東元太郎居士を従へて登場着座、このとき下手よりラーストラパーラ氏、ヴアンデイーンスト氏、アベラツネ氏、ヂャヤセーナ氏等南方人現れる。ソービタ長老のパーリ語による諸天勧請文あり、つづいてナモータツサの声に、会衆一同三帰依文を唱和する。長老会衆の方にむきなほり、一同五戒を授ける。次にタイ国大使の三拝焼香あり、つづいてソービタ長老とアーナンダ居士との間に問答がかはされた。内容は原名ナーマネーラ・パンヒといひ、南伝大蔵経第二十三巻小誦経中に問沙弥文と国訳されてゐるもので、仏教々義の中核をなす名・色・受・四聖諦・五取蘊・七菩提分・八聖道その他についてのべたもの、長老がたづね、居士が答へる。用語はパーリ語である。長老のサードウ（善哉）の声に問答終り、一如洞阿闍梨ならびに法妹、南方人の右繞礼はじまる。このあひだにソービタ長老、アーナンダ居士の三宝讃称文の声つづく。右繞礼終つて雅楽のうちに武田阿闍梨等客席中央を通つて退場、ソービタ長老は上手に、南方人は下手に去る。前と同じく牛込高等女学校生徒の合唱、「成道の歌」のうちに閉幕、第二部に入る。[35]

この後に、祝電披露として、タイ国仏教協会会長で司法大臣タムロン、ハノイの北圻仏教総会会長、ビルマ国枢密院議長ウ・ツウイン、シェダゴン・パゴダ管理委員会などからあった。

続いて、第二部は、会長井上哲次郎、大東亜大臣の青木一男、タイ国大使ウイチット・ワカターンの挨拶があり、大川周明（一八八六～一九五七）が「印度独立の意義」と題して講演を行っている。大川は、六月六日付の日記にて、「六時日比谷公会堂の南方仏陀祭に出席。久振にて宇井〔伯寿〕・長井〔真琴〕・宮本〔正尊〕の諸君及び水野

梅暁翁に会ふ。印度独立の意義と題して講演。八時半帰宅[36]」と記している。

その後、財団法人国際文化振興会がフランス向けの文化映画として作成した「白鷺城」が、国内で初めて上映された。また、原智恵子のピアノ伴奏で、声楽家の三浦環によって「荒城の月」が歌われた。そして文部省の文化映画「法隆寺」が上映され、午後九時に閉会した。この時に、国内向けのラジオ放送は、なかった模様である[37]。

2　釈興然の顕彰と三会寺

会場となった三会寺は、釈興然（一八四九～一九二四）のゆかりの寺院で、現在は周辺が宅地化されているが、かつては農村地帯であった。第三、四回の南方仏陀祭の祭壇に奉じられた仏像は、興然がタイから将来した仏像である。『海外仏教事情』には、次のようにある。

> 中央に高く安置せられる金色の仏体は、第三回南方仏陀祭このかたおなじみの釈尊像で、明治四十一年シヤム国より迎へられたタイ古仏像である。その由来をのべると、明治四十年十月、その頃わが国で唯一人の南方仏教の持戒僧、グナラタナ釈興然師が、シヤム国公使ピヤナリソン氏の懇請に応じ、和田慶本沙弥を従へ、セイロンより帰朝するアーナンダ吉松快祐、ソービタ鳥家仁度の両師とシンガポールで出会ひ、かの国において雨安居をすごし、翌四十一年十一月帰国に際し、シヤム皇室ならびに各寺院より贈られた五十余体の釈迦如来像のうちのひとつである。これらの仏像はブッダの三十二相に因み、神奈川県下の三十二箇寺に安置された。が、祭壇奉安の釈尊像は、釈興然師が南方僧団移植の目的で創立された釈尊正風会の釈仁度師を通じて国際仏教協会に寄贈され、現在は〔東京〕芝〔公園〕山地内金地院に疎開中のものである[38]。

日本は、大乗仏教であり、南伝由来のウェーサク祭は、大きくは行われていなかったが、明治期から釈興然によ

り始められたのであった。真言宗僧侶であった興然は、日本人で初めて上座部の比丘戒をセイロンで受けた人物である。ウェーサク祭は、帰国後の一八九三（明治二六）年から「吠舎佉（ヴァイシャーカ）月満月会」として、三会寺で行ってきた法要であったが、釈尊正風会を設立した釈興然は、弟子をセイロンへ派遣するなど、日本での南伝仏教の移植を目指した僧侶であった。三会寺では、建築家の伊東忠太（一八六七～一九五四）によって、タイ式仏堂が建立予定であったが未着工に終わったという。[39]

国際仏教協会は、一九四四（昭和一九）年三月一五日に「興然和上二十一回忌法要」を実施した。後援は釈尊正風会で、会場は三会寺で行われた。その直前の同年二月一五日には、釈興然の弟子で三会寺住職の釈仁度によって、戦勝祈願法要として巴利経典読誦涅槃会が執行されている。国際仏教協会は、それまで釈興然を顕彰した形跡がなく、突如として協会の事業に登場したのである。つまり協会は、日本仏教と上座仏教を結ぶ象徴として、南方仏陀祭と釈興然を宣伝に利用したといえよう。

第五回南方仏陀祭（一九四五年）以降

第五回南方仏陀祭は、一九四五（昭和二〇）年五月二五日に、前年と同様に横浜の三会寺で行われた。戦時下ゆえに、開催を予告する記事があるだけで、詳細は未詳である。

敗戦直後の一九四五（昭和二〇）年八月二六日、大東亜省が廃止となり、補助金も途絶え、東南アジアの仏教に関する調査研究と文化工作の必要性はなくなった。同協会は一九四六年度の事業計画を発表して組織の継続を図った。[40]

第六回南方仏陀祭は、国際仏教協会の主催により、一九四六（昭和二一）年六月一日の午後二時より、神奈川県横浜市鶴見区の曹洞宗大本山總持寺で開催された。予告の記事によれば「ソービタ釈仁度氏の導師で挙行し、つゞ

いて日本仏教による法要を渡辺〔玄宗〕総持寺貫主の導師で行ひ、鶴見高女生の合唱の後長井真琴博士の講演がある筈[41]」とのことである。一九四七年に、協会は、「ブディスト・ソサイエティ[42]」と改称したが、目立った活動は確認できず、その後に解散したと見られる。

一九四九（昭和二四）年、天秤座と満月が重なる五月一二日に、「第九回ウエーサーカ祭」が行われた。この時は、三会寺の住職と檀信徒の協力を得て、釈仁度を中心に立花俊道らが参加する有志主催として開催された[43]。

おわりに

これまで、国際仏教協会の主催により「南方仏陀祭」と称した、上座仏教に由来するウェーサク祭を見てきた。この時期、上座仏教への戦略的な関心が増大していたことが明らかとなった。

宗教儀礼ではあるが、日本の南方攻略を背景に、情報局や大東亜省、文部省などの政府各省庁の後援のもとに実施された。つまり、宗教目的の行事とはいえ、政治目的の式典にもなっていたのである。祭典の執行を通して、日本の大乗仏教と南方地域の上座仏教が、新聞や海外放送も作用して、同じ仏教であるという一体化を内外に宣伝する狙いがあったのである。戦時下の日本にとって、東南アジアでの統治を進めるため、上座仏教徒が懐柔すべき存在であったのである。

戦時下に日本と南方をつなぐ存在として宣伝されたのは、南方仏陀祭だけではない。平安時代の真如親王は、皇族出身の元皇太子で、真言宗宗祖の弘法大師空海の十大弟子の一人であり、さらにインドに向かう途中で南方に没したことから、にわかに存在が増大した。その結果、仏教界と官民が一体となった「真如親王奉讃会」が発足して、宣伝活動が行われた[44]。

ビルマの仏教者オウタマ（U Ottama, 1879-1939）は、イギリスからの独立運動に関わり、日本にも支援者が多

く、戦時中には、「オッタマ比丘顕彰会」が発足している。[45]

またタイやビルマから「仏舎利」とされる聖遺物を招請して、仏教による日本と南方地域の一体感を演出したのである。

日本と南方の仏教は、同じ仏教ではあるが、大きく異なるものである。その連帯を醸し出すために、日本仏教を一方的に宣伝することは非効果的であると、仏教界と政府では認識していたに違いない。そこで、上座仏教に由来する文化や事物を通して宣伝がなされたのである。それが、南方仏陀祭であった。

附録　南方仏陀祭の主要関係記事

『海外仏教事情』（国際仏教協会）

「南方仏陀祭の盛況　七月五日午後一時日比谷公会堂に於て」（第七巻第三号、一九四一年八月、六三―六八頁）。本文中の小見出し記事は、「南方仏陀祭次第」（六四頁）、「海外仏教団体よりの祝電」（六五―六六頁）、井上哲次郎（会長、博士）「南方仏陀祭の挨拶」（六六―六七頁）、「「南方仏陀祭」に於ける伊藤情報局総裁の挨拶」（六七―六八頁）

「ニュース（協会関係）／第二回南方仏陀祭挙行」（第八巻第二号、一九四二年八月、四三―四四頁）

「ニウズ／第二回南方仏陀祭の海外よりの反響」（第八巻第三号、一九四二年一一月、五三―五四頁）

「内外だより／第三回南方仏陀祭日時決定」（第九巻第二号、一九四三年四月、五五頁）

「内外だより／第三回南方仏陀祭」（第九巻第四号、一九四三年八月、三〇―三三頁）。本文中の小見出し記事は「井上会長の挨拶」（三一頁）、「青木大東亜大臣の挨拶」（三二頁）、「タイ国大使ディレーク閣下の挨拶（訳文）」（三二―三三頁）

「わが建設譜／第四回南方仏陀祭」（第一〇巻第二号、一九四四年四月、三七頁）

東元多郎「わが建設譜／南方仏陀祭」（第一〇巻第四号、一九四四年一〇月、三二―三四頁）

『中外日報』（中外日報社）

「国際色豊かに／最初の南方仏陀祭」（第一二五六二号、一九四一年七月八日、三頁）

「南方仏教諸国二千年来の行事／仏陀祭、日本でも営む／大東亜戦争下意義一入深く」（第一二八七二号、一九四二年七月二一日、二頁）

「共栄圏仏徒と必勝祈願／南方の仏陀祭をそのまゝに／満月の夜を徹してパーリ経典読誦」（第一三一一六号、一九四三年五月一六日、三頁）

「南方仏陀祭」（第一三四三四号、一九四四年六月六日、二頁）

「国際仏教協会主催／第五回南方仏陀祭」（第一三六七七号、一九四五年五月一八日、二頁）

「第六回ウエーサーカ祭／国際仏教協会が開催」（第一三八八四号、一九四六年五月二五日、二頁）

「ウエーサーカ祭／五月十二日横浜・三会寺にて」（第一四三七七号、一九四九年四月二八日、二頁）

東元多郎「ウエーサーカ祭の思い出」（全五回、第一四四一七～一四四二一号、一九四九年七月三〇日、八月二、四、八、九日、各一頁）

「月まどかなるウエーサーカ祭」（第一四六九九号、一九五一年五月二四日、二頁）

『朝日新聞』（朝日新聞社東京本社）

「南の香り豊かに／けふ日比谷に仏陀祭」（第一九八五三号、一九四一年七月六日、二頁）

「南方仏陀祭／日比谷公会堂で」（第二〇二三四号、一九四二年七月二四日、八頁）

「増上寺で南方仏陀祭」（第二〇五三〇号、一九四三年五月一九日、三頁）

「必勝祈願の南方仏陀祭」（第二〇九〇三号、一九四四年六月三日、三頁）

『読売新聞』（読売新聞社）　※一九四二年八月から一九四六年四月まで『読売報知』改題

「初の仏教祭典／南方から名僧を招いて」（第二三一一七号、一九四一年五月三〇日、夕刊二頁）

「南方仏陀祭」（第二三一五四号、一九四一年七月六日、夕刊二頁）

「米英撃滅を祈願／十八、十九日盛大に南方仏陀祭」（第二三八二八号、一九四三年五月一五日、朝刊三頁）

「（社告）第三回南方仏陀祭」（第二三八三〇号、一九四三年五月一七日、朝刊二頁）

「国際仏教会で仏陀祭」（第二四二一二号、一九四四年六月三日、朝刊三頁）

（文化庁文化部宗務課専門職）

注記

（1）国際仏教協会については、拙稿「国際仏教協会と大正大学をめぐって――昭和前期の仏教思潮」（『佛教文化学会紀要』第一四号、佛教文化学会、二〇〇五年）を参照。後に同稿は、拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』（法藏館、二〇一五年）の第Ⅰ部第二章「国際仏教協会の調査研究とその変容」として、大幅に加筆修正して再録した。

同協会が刊行していた雑誌は、次の復刻版がある。*Young East. Reprint ed.* Vol. 1, No. 1 (June 1925)-Vol. 10, No. 2 (1944). Tokyo: Pitaka, 1978. 『海外仏教事情』は、龍谷大学アジア仏教文化研究センター「戦時下「日本仏教」の国際交流」研究班（中西直樹（代表）・林行夫・吉永進一・大澤広嗣）編『資料集・戦時下「日本仏教」の国際交流　第Ⅱ期　南方仏教圏との交流』（全三巻、不二出版、二〇一六年）。

（2）南方仏陀祭に関する先行研究として、佐藤哲朗『大アジア思想活劇――仏教が結んだ、もうひとつの近代史』（サンガ、二〇〇八年）所収の「大東亜共栄圏と日本仏教・ひとつの事例」（五〇〇―五〇三頁）に言及がある。

一五）年に内閣情報局が設置されると初代の総裁となり、その後は貴族院議員を務めた。

(17)「情報局官制」（昭和一五年一二月五日勅令第八六四号）から、関係条文を抄出する。

第一条　情報局ハ内閣総理大臣ノ管理ニ属シ左ノ事項ニ関スル事項ヲ掌ル

一　国策遂行ノ基礎タル事項ニ関スル情報蒐集、報道及啓発宣伝

二　新聞紙其ノ他ノ出版物ニ関スル国家総動員法第二十条ニ規定スル処分

三　電話ニ依ル放送事項ニ関スル指導取締

四　映画、蓄音器レコード、演劇及演芸ノ国策遂行ノ基礎タル事項ニ関スル啓発宣伝上必要ナル指導取締。

（「情報局官制（昭和一五年一二月五日勅令第八六四号）」『官報』第四一七六号、内閣印刷局、一九四〇年一二月六日、一九三―一九四頁）。

(18)『中外日報』（一九四二年七月二一日）。

(19)『海外仏教事情』（第八巻第二号、一九四二年）によれば、第二回南方仏陀祭で演奏されたのは「世界の黎明」とあるが、大日本吹奏楽連盟（現、一般社団法人全日本吹奏楽連盟）が制定した行進曲「東亜の黎明」と思われる。

(20)『海外仏教事情』（第八巻第三号、一九四二年）、五四頁。

(21)『海外仏教事情』（第九巻第二号、一九四三年）、五五頁。

(22) 童謡「八の日東亜の花まつり」の歌詞の原文が確認できなかったため、国立国会図書館が館内で限定公開する歴史的音源から、当該の楽曲を聴取して歌詞を再現した。(http://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3571655)

なお、作曲者の佐々木すぐる（一八九二～一九六六）は、多数の童謡を手掛け、「月の沙漠」や「お山の杉の子」、戦時童謡では「兵隊さんよありがとう」で知られる。他の仏教童謡として、例えば、「花祭りこども踊り」（作詞江崎小秋、作曲佐々木すぐる）は、東京連合花まつり会の依頼で、一九三五（昭和一〇）に作られた。振付は、賀来琢磨（一九〇六～一九七五）。青い鳥童謡音楽学校の児童により、コロムビアから発売された（番号二八二八二）。

(23) 江崎小秋（一九〇二～一九四五）の略歴については、安藤嶺丸編『江崎小秋歌謡選集』（仏教年鑑社、一九三六年）所収の巻末「作者伝」（五～七頁）、「江崎小秋」（熊崎閑由編『仏教年鑑　昭和十三年版』仏教年鑑社、一九三八年）、福本康之「昭和戦前期の仏教洋楽に関する一考察（Ⅱ）――日本仏教童謡協会と江崎小秋の活動を中心に」（『環境と経営――静岡産業大学論集』第八巻第一号、静岡産業大学経営研究所、二〇〇二年、一五―二八頁）を参照した。

(24) 弘田竜太郎「熱と純情の詩人」（前掲、『江崎小秋歌謡選集』）、i頁。
(25) 井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』（現代仏教家人名辞典刊行会、一九一七年）によれば、伊豆宥法（一八八九～?）は東京浅草の西鳥越町で生まれた。一九一二（明治四五）年二月に、豊山大学（現在の大正大学の前身の一つ）の本科を卒業。その後、東洋大学にて宗教哲学を学ぶ。雑誌『加持世界』（加持世界社）の主筆。群馬県新田郡塚本村（現、太田市）の真言宗豊山派胎養寺の住職（「伊豆宥法」、三七頁）。なお、現在の胎養寺によれば、歴代住職として伊豆の名前は伝わっているが記録や墓所がないとのことで、伊豆の履歴については今後の課題である。
(26) 無署名記事「内外だより／第三回南方仏陀祭」（『海外仏教事情』第九巻第四号、一九四三年八月）、三〇頁。
(27) 『読売報知』（一九四三年五月一七日）。
(28) 北山節郎『全記録　ラジオ・トウキョウ　戦時体制下日本の対外放送――Ⅱ　「大東亜」への道』（田畑書店、一九八八年）、二四四、三五一、三五三頁。同『同――Ⅲ　敗北への道』（同）、一三、七九頁。
　なお太田与一郎は、戦後にビルマとの仏舎利交流に関与した。静岡県沼津市にある宗教法人「立正宗大本山日緬寺」（仏教系単立、静岡県知事所轄）にある寺宝の仏舎利には、以下の由来がある。一九五二（昭和二七）年に、駐日ビルマ大使であったウ・テイモンが、女婿リンピ・タイ・テイン・ラツ殿下が奉持してきた仏舎利を寄贈したものである。仏舎利は、東京中央放送局国際課に在籍していた太田の紹介で、日緬協会の斡旋により、同協会主管者であった日緬寺開祖の結城瑞光に寄進したという（日緬寺ウェブサイト、http://www.sakezuka.jp/festival/busshari.php、二〇一六年八月一六日確認）。
(29) 『読売報知』（一九四三年五月一五日）。
(30) 『海外仏教事情』（第九巻第四号、一九四三年八月）、三二頁。
(31) 青木一男後援会編『青木一男　その信念と行動』（青木法律事務所、一九七〇年）所収の「善光寺日本忠霊殿の造営」（一五〇―一五三頁）を参照。
(32) 『海外仏教事情』（第一〇巻第二号、一九四四年）、三七頁。
(33) 『海外仏教事情』（第一〇巻第四号、一九四四年）、三二頁。
(34) 「武田豊四郎」（『読売新聞社編』『宗教大観　第四巻　護教篇』読売新聞社、一九三三年）、七一三頁。
(35) 『海外仏教事情』（第一〇巻第四号、一九四四年）、三三頁。
(36) 大川周明顕彰会編『大川周明日記』（岩崎学術出版社、一九八六年）、三一九頁。

(37)『朝日新聞』一九四四年六月六日の「ラジオ」欄には、南方仏陀祭の番組に関する記載はない。
(38)東元多郎「わが建設譜／南方仏陀祭」(『海外仏教事情』第一〇巻第四号、一九四四年一〇月)、三二―三三頁。
(39)釈興然については、常光浩然『明治の仏教者　上』(春秋社、一九六八年)所収の「釈興然」、東元慶喜「グナラタナ釈興然の南方僧団移植の事業」(『印度学仏教学研究』第一九巻第一号、日本印度学仏教学会、一九七〇年)、東元慶喜「釈尊正風会のひとびと」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第四〇号、駒澤大学仏教学部、一九八二年)、R・ジャフィ著、前川健一訳「釈尊を探して――近代日本仏教の誕生と世界旅行」(『思想』第九四三号、特集・仏教／近代／アジア、岩波書店、二〇〇二年)、奥山直司「日本仏教とセイロン仏教との出会い――釈興然の留学を中心に」(『コンタクト・ゾーン』第二号、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター、二〇〇八年)を参照。
(40)国際仏教協会の新体制について、「世界平和のためには平和的世界宗教の存在及活動は必要である。故に仏教界の国際団体たる、国際仏教協会は昭和二十一年度の新計画として、一、仏陀祭の執行　二、仏教学会　三、「ヤングイースト」及「国際仏教」の発行　四、協会概要の出版、其他最近仏教十二条を世に送つて著名のハンフレーズ氏を中心の研究委員会、国際仏教講座、海外との連絡資料交換を乞ふ。尚新理事としては、芙蓉浄淳、網代智海、芙蓉良順、山本快竜の諸師其他が選出された」(「国際仏教協会新活動」『六大新報』第二一五六号、六大新報社、一九四六年、三頁)。
　なお文中の「仏教十二条」は、ロンドン仏教協会総裁のハンフレーズ(Christmas Humphreys, 一九〇一～一九八三)によって発表された「仏教の十二原理」である(『六大新報』第二一六二号、一九四六年、ほか掲載)。敗戦直後にハンフレーズは、極東国際軍事裁判の判事として来日した。
(41)『中外日報』(一九四六年五月二五日)。
(42)前掲、「国際仏教協会新活動」三頁。無署名「ブデイスト・ソサイアテイ発足」(『中外日報』第一四〇九四号、一九四七年七月一日)、二面。
(43)『中外日報』(一九四九年八月八日)。
(44)拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』(法藏館、二〇一五年)の第Ⅲ部第一章「真如親王奉讃会とシンガポール」を参照。
(45)オッタマ比丘顕彰会編『新生ビルマの先覚ウ・オッタマ小伝』(オッタマ比丘顕彰会、一九四三年)を参照。オウタマについては、伊東利勝「オウタマ僧正と永井行慈上人」(拙編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』アジア遊学第一九六号、勉誠出版、二〇一六年)を参照。